

氏名・(本籍地)	南部千代里(東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記の番号	甲第108号
学位授与の日付	平成28年3月15日
学位論文題目	パウロと親鸞における宗教的悪と 苦の問題についての比較思想研究
論文審査委員	主査 司馬 春 英 副査 村 上 興 匡 副査 船 本 弘 毅

南部 千代里 氏 学位請求論文審査報告書

「パウロと親鸞における宗教的悪と苦の問題についての比較思想研究」

論文の内容の要旨

[目的と方法] 本論文は、比較思想的方法を用いて、パウロと親鸞のそれぞれの思想における「悪」と「苦」のとらえ方に注目する。従来、交換可能とまでいわれていたパウロおよび親鸞の救済の論理の比較において、相似のみならず相違の関係があることを検討しようとするものである。そのために、本論文では、まず宗教的「悪」と「苦」の関係に着目し、パウロと親鸞のそれぞれの救済の論理における「律法」と「戒律」の位置付けについての比較考察を試みる。

[構成] 本論文の構成は下記の通りである。

- 第1章 序論
- 第2章 パウロにおける悪と苦
- 第3章 親鸞における悪と苦
- 第4章 相似と相違の比較軸
- 第5章 結論

引用文献

参考文献

第1章の序論において、比較思想としてパウロと親鸞を扱った先行研究が概観され、問題の所在が述べられ、[目的と方法][構成]が示される。第2章では、古代イスラエルの一神教を母体とするユダヤ教・エルサレム教団・パウロの三者について、「律法」を守ることと関連して、「悪」と「苦」がどのようなものと考えられているのかについて、聖書の記述に基づいて資料の整理・比較が行われ、検討が加えられる。後者ほど形式的に律法を守ることが主張されなくなり、神の前で罪人としてへりくだることの重要性が強調されている。第3章において、釈迦が説いた仏教を継承した旧仏教・法然教団・親鸞の三者について、「戒律」を守ることと関連して、「悪」と「苦」がどのようなものと考えられているのかについて、諸経典、親鸞やその弟子の著作に基づいて、資料の整理・比較が行われ、検討が加えられる。後者ほど戒律を守ることが主張されなくなり、弥陀の前ではすべてのものは「悪人」であり、「摂取不捨」の弥陀の大悲の重要性が強調されている。第4章では、パウロ側と親鸞側を横軸として、パウロ側の「ユダヤ教・エルサレム教団・パウロ」の三者と、親鸞側の「旧仏教・法然教団・親鸞」の三者をそれぞれの比較を縦軸として議論を整理・比較することにより、パウロ側と親鸞側の相似と相違について検討が加えられる。まず縦軸の比較として、パウロ側三者では「律法・悪・苦」の解釈が三段階に変化しており、人による律法の遵守よりも神・キリストによる救済が強調されるようになってきているのに対し、親鸞側三者でも「戒律・悪・苦」の解釈が三段階に変化しており、人による戒律の遵守、善行よりも弥陀の慈悲による救済(往生)が強調されるようになっていて、両者の構造に相似の関係があることが明らかとされる。その一方で、横軸の比較では、両者とも人の力による救済が否定されているのは同じであるが、悪人がそのまま救われるのではなく、神が立てた十字架上でのイエスの死による贖い(神の義)が強調されるパウロ側の救済の論理と、弥陀自身の功德を回向することにより煩惱具足のまま(悪人を悪人のまま)に、これを摂取して捨てないことが強調される親鸞側の救済の論理との、相違が指摘される。第5章では、これまでの議論に基づいて総括が試みられている。

審査結果の要旨

本論文は、パウロと親鸞の救済の論理を、構造的にとらえて比較検討している点に特徴がある。従来研究では、ダマスコ体験と法然との出会い、信仰義認と信樂獲得、ユダヤ教からの迫害と承元の法難など、個別の出来事、教えの比

較から、両者の類似性について語られることが多かった。本論文では、パウロの思想をより厳密に理解するために、ユダヤ教とパウロの中間にエルサレム教団を挿入し、ユダヤ教、エルサレム教団、パウロの三者構造を立てることによって、それぞれが「律法」をどう解釈し、宗教的悪と苦を理解したかについて、周到に資料を積み上げ、比較検討を行っている。また同様に、親鸞においても、その思想をより厳密に理解するために、旧仏教と親鸞の中間に法然教団を挿入し、旧仏教、法然教団、親鸞の三者構造を立てることによって、それぞれが「戒律」をどう解釈し、宗教的悪と苦を理解したかについて、周到に資料を積み上げ、比較検討を行っている。そのうえで、両者を比較することにより、「律法・悪・苦」と「戒律・悪・苦」に関して構造的な類似があることを明らかにした。同時に、それぞれの段階の比較を通じて、パウロ側、親鸞側でなぜ、「悪人」（律法を守らないもの、戒律を守らないもの）が救われるのかを説明する論理に大きな相違があることを指摘している。パウロ側においては、神の義と罪人としての自覚に力点があるのに対して、親鸞側では「煩惱具足」のまま衆生を「撰取不捨」する弥陀の大悲に力点が置かれている。個々、個別の事例に基づくのではなく、パウロおよび親鸞の両者を救済の思想の全体構造を比較することにより、立体的な分析、解釈を行い得たことは大きく評価できよう。

一方、その明確すぎる整理分析により、解釈がやや乱暴なものとなっていることは否めない。論理的で合理にすぎる整理では、信仰上の解釈として微妙ではあるが非常に重要な部分が抜け落ちてしまうことが危惧される。たとえば、エルサレム教団の位置付けをペトロ中心とするかヤコブ中心とするか、法然においてすでに「悪人正機」が説かれたか否かなど、教派、宗派によって解釈に揺らぎがあることが予想される問題については、より慎重かつ複眼的な読解、解釈が求められよう。

しかしながら、本論文が神学、宗学の論文ではなく、比較思想、比較宗教の論文であり、ともに「他力（人間側の努力による救済の否定）」という相似点を持ったパウロと親鸞の救済の論理を、全体として構造的に整理し、比較するためのパースペクティブを示すことを目的としたものであることを考えるなら、これら神学的、宗学的問題に関わる諸課題は、本論文の価値を著しく貶めるものではなく、容認しうるものであると考える。パウロ、親鸞の比較思想研究は数多いが、両者における悪と苦、救済の問題について全体構造から比較考察しようとした議論はそう多くない。その意味で本論文は公開の価値あるものであると確信し、これを博士（文学）の学位授与に相応しいものと判定する。